



Title	ルーマニア語の特異性について : ロマンズ諸語との形態的比較
Author(s)	伊藤, 太吾
Citation	大阪外国語大学学報. 1978, 42, p. 63-76
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80712
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ルーマニア語の特異性について

—— ロマンズ諸語との形態的比較 ——

伊 藤 太 吾

LA INDIVIDUALIDAD DEL RUMANO ENTRE LAS LENGUAS ROMANICAS

TAIGO ITO

En este ensayo he comparado morfológicamente las lenguas portuguesa, española, francesa, italiana y dalmata con el rumano con el objeto de hacer clara la individualidad de dicha lengua entre las lenguas románicas. He investigado 15 itens. Como resultado se podría decir que el rumano es una lengua muy conservativa y se vale de muchas expresiones perifrásticas muy peculiares. Y además, se admite una gran cantidad de influencia del búlgaro y albanés, los cuales nunca ejercen influencia sobre las otras lenguas romances.

序) ルーマニア語(以下羅語)と他のロマンス語との比較研究は、Al. Niculescu (1965)によれば、Ovid Densusianu の *Histoire de la langue roumaine* (1901, Paris) が嚆矢であるというが、実はそれ以前から羅語史の大きな問題として、羅語が現在のルーマニアでローマ時代から中断されることなく用いられているのか、あるいは、ドナウ河以南のバルカン半島から後世再輸入されたものかという相対立する議論がなされている。私は1976年に、継続説を排斥して借用説を唱えた。その際主としてアルバニア語並びにブルガリア語と羅語が一致する言語現象及び言語学的というよりもむしろ文化的背景に力点を置いてバルカン半島の言語的統一の問題を解明したのであるが、今回は、他の4つのロマンス語即ち葡語・西語・仏語・伊語そして場合によってはダルマチア語と、主として形態的比較を試み羅語が他のロマンス諸語に対してどの様に“特異”でありその原因は何かを純粹に言語学的見地から考察してみたい。

羅語の形態論については、2つの格の保存及び男・女・中の3性の存続という大きな問題があるが、私は既に1976年にそのことに関しては結論を下したから再びここでは扱わない。その他の形態論に関する問題を全て扱う紙幅はないので、羅語の極めて特徴的な事柄のみを重点的に考察することになろう。

a) 数字の1を表すラテン語の UNUS, -UM, -A は葡語・西語・仏語・伊語・ダルマチア語では中性が消失し、その結果それぞれ、uno uma, uno una, un une, uno una, join joinaとなるが、羅語

では **un o** となり、女性形が特異な形態を示す。これは、葡語の男性単数定冠詞 **o** 及び女性単数定冠詞 **a** が、羅語を除く他のロマンス諸語の定冠詞が(－)l(－) 付きの形を示す中で、唯一の例外を成すと同じ程度のしかも単なる音韻的理由に寄るものであるが、その為に特殊な趣を与えている。この数詞がロマンス語では不定冠詞となり名詞に前置される点は共通している。各言語ともラテン語の3性から男性と女性の2性になっている点は、名詞や形容詞の場合と同じ傾向の結果である。

羅語に男・女・中の3性があるという意見もあるが、その場合でも中性は単数では男性と同形であり複数では女性と同形であるので、2つの異なる形式があれば良いことになる。

この項は、羅語が特異であることを示す為ではないが、各々のロマンス語の不定冠詞の形を次に示そう。

ラテン語	葡語	西語	仏語	伊語	ダルマチア語	羅語
UNUS	um	un	un	un(o)	un	un
UNA	uma	una	une	una	una	o

b) 例えば西語で **unos amigos** と言えば“数人の友人”を示すのであるが、この **unos** の用法は実はラテン語に既にあったものである。この不定形容詞は葡語では **uns umas**、西語では **unos unas** と言う。ところが仏語や伊語では **des** という部分冠詞を使ったり、又それぞれ **quelque qualche** と言い、ダルマチア語でも **kulke** 又は **calco** であるが、羅語では **nişte** (<NE SCIO QUID) と言う。この羅語の場合、語源の形態素の数が多く、その結果音形的にも特異な感じを与えている。仏語・伊語・ダルマチア語の語源的形態素は2ヶであるが、羅語の3ヶ形態素を使用するこの現在の形態は、守旧的とも言えるし同時に又迂言的・補強的とも言える。

c) 次に、15から19までの数詞を一覧表にしてみよう。

	ラテン語	葡語	西語	仏語	伊語	ダルマチア語	羅語
15	QUINDECIM	quize	quince	quinze	quindici	cionco	cin(ci) sprezece
16	SEDECIM	dezasseis	diez y seis	seize	sedici	setco	şasesprezece
17	SEPTENDECIM	dezassete	diez y siete	dix-sept	diciassete	dikisapto	şaptsprezece
18	OCTODECIM	dezoito	diez y ocho	dix-huit	diciotto	dikidapto	optsprezece
19	NOVENDECIM	dezanove	diez y nueve	dix-neuf	diciannove	dikinú	nouăsprezece

羅語を除く言語では、ダルマチア語をも含めて、16に不一致を見る。18・19は、AC 又は ET という接辞を介して表す方法が俗ラテン語で現れ、どちらを選択したかによる。伊語は **DECEM AC OCTO > dece ac octo > diciotto** の方を選び、西語は **DECEM ET OCTO > dece et octo > diez y ocho (=dieciocho)** を選んだ。18・19をそれぞれ **DUODEVIGINTI UNDEVIGINTI** と言わないのが俗ラテン語での一般的傾向であったから、AC と ET のどちらを選択するかだけの問題であった。

ところが羅語の場合、11から15までも、上表と同じ形式を示すのである。即ち、11=**unsprezece** 12=**doisprezece** 13=**treisprezece** 14=**patrusprezece** となる。**-sprezece** は口語では **-şpe** となるが、他に **-sprece -spce -şpce** などの形もある。いずれにせよ、元の形は **UNUS**

SUPER DECEM,etc. であり形態素は悉くラテン語である。Al. Rasetti (1973) によれば、スラブ語では *jedinū na dešete* と言うが *na* が *spre* に当たると言う。Fl. Dimitrescu (1974) に寄れば、アルバニア語でも同じ構造で、*njëmbëdhjetë* (11=1 spre 10), *tetëmbdhjetë* (18=8 spre 10) だと言う。

羅語の11から19までの数詞については、ブルガリア語 and/or アルバニア語の影響は否定できないと私は思う。又、Meyer Lübke (1974) も同じ意見である。

d) 現代仏語では、70、80、90はそれぞれ *soixante-dix quatre-vingts quatre-vingts-dix* と言われ、20進法の特異な形態を示しているが、古仏語や現代の方言には *se(p)tante oitante uitante octante nonante* などの形も見られる。葡語・西語・仏語・伊語では、20から90まで、今述べた仏語の例外を除き他は全て、VIGINTI TRIGINTA QUADRAGINTA QUINQUAGINTA SEXAGINTA SEPTUAGINTA OCTOGINTA NONAGINTA を継承しているが、羅語は、*douăzeci treizeci patruzeci cin(c)zeci șaizeci șaptezeci optzeci nouăzeci* という風なスラヴ語的並置法を用いている。古ブルガリア語では20は *duva deseti* (>*douazeci*) と言っていた。又現代ブルガリア語では、20=*dvajset* 30=*trijset* と言い、アルバニア語では、20=*njëzët*(*une vingtaine*) 30=*tridhjet* 40=*dyzët* (*deux vingtaines*) と言う。

又統辞論にもかかわってくるが、ルーマニア語では20以降・アロムン方言では11以降、数詞と数えられる名詞との間に前置詞 *de* (アロムン方言では *di*) が必要である。これは、古ブルガリア語で属格を用いていた為だというのは Sandfeld (1930) の説である。(西語では *millón* の次に *de* が要求されるのに似ている。)

この項目も、ブルガリア語・アルバニア語の影響は否定できない。次に20から90までの数詞を一覧表にしてみよう。

	ラテン語	葡語	西語	仏語	伊語	グルマチア語	羅語
20	VIGINTI	vinte	veinte	vingt	venti	vench	douăzeci
30	TRIGINTA	trinta	treinta	trente	trenta	trianta	treizeci
40	QUADRAGINTA	quarenta	cuarenta	quarente	quaranta	quaranta	patruzeci
50	SEXAGINTA	cinquenta	cincuenta	cinquante	cinquanta	cinquanta	cin(c)zeci
60	SEPTUAGINTA	sessenta	sesenta	soixante	sessanta	sessuanta	șai zeci
70	OCTOGINTA	setenta	setenta	soixante-dix	settanta	septuanta	șaptezeci
80	OCTOGINTA	oitenta	ochenta	quatre-vingts	ottantia	octuanta	optzeci
90	NONAGINTA	noventa	noventa	quatre-vingt-dix	novanta	nonuanta	nouăzeci

e) グルマチア語の *éant* をはじめとして、イタリア以西のロマンス諸語では、100を表すのに CENTUM を受け継いでいるが、羅語のみ *o sută* と言う。200は羅語では *două sute* であり、スラヴ語的である。100代は、ラテン語以外の形態素を借用する極めて稀な例である。Meyer Lübke (1974) は、スラブ語ではなくダーキア語を借用したと言っている。私は、100という位の高い数字が基層語にあったか疑問であるし、又あったとしても残る可能性は少なかったと思う。そして、ラテン語の CENTUM を使用していないのは 5=QUINQUE > *cinci* < CENTUM の如く同音異義

になった為だと思う。しかも、その同音異語の現象が起るのはスラブ族の侵入後であることから、ダーキア語説は受け入れられない。

Sandfeld (1930) に寄ると、o という不定冠詞が *sutā* に前置されるのは、アルバニア語に対応しているという。o *sutā* はアルバニア語では *një qind* と言う。

この項目について、ブルガリア語・アルバニア語の影響は否定できないであろう。

f) 1000は羅語では o *mie* であるが、2000以上は *două mii* の如く複数形がある。同じく複数形があるのは伊語で、1000が *mille* であるのに対して2000は *due mila* である。葡語・西語・仏語は1000、2000をそれぞれ、*mil dois mil mil dos mil mille deux mille* と言い複数形態は取らない。

羅語の *mie* という単数形は、実は *MILIA* という複数形に由来する。この様に複数形から単数形が派生するのは、西語に *fruta* < *FRUCTA* (*FRUCTUS* の複数形) の様な例があるとはいうものの、羅語の特徴と言える。しかし、16世紀には単数も複数も *mie* であった。又、Pavao Tekavčić (1972) に寄れば、伊語の *mila* という複数形も後世の類推だという。いずれにせよ、ラテン語では 1000=MILLE 2000=DUO MILIA と言っていたのだから、伊語・羅語は守旧的であると言える。

g) 羅語の序数は、“第1の”という意味の *prim(ul) întâi* (<ANTANEUS. Fl.Dimitrescu(1974) によれば、この構造もアルバニア語的であると言う)を除き、他は全て、例えば“第2の” *al doilea* (男性形) *a doua* (女性形) に見る如く、男性形は *al*+基数詞+*lea*, 女性形は *a*+基数詞+*a* という形式を原則として取る。Fl. Dimitrescu (1974) に寄れば、この形式を取るのは16世紀以降であると言う。Al. Rosetti (1973) に寄れば、*al doilea* という形は19世紀からで、それ以前は *al doile al treile* であったと言う。更にその前の形は、Fl. Dimitrescu (1974) に寄れば、*al doil al treil* だったと言う。又、一般に古形を保存しているアロムン方言は *-le* の形態である。いずれにせよ、*-le(a)* *-a* の起源は定冠詞だと私は考えている。基数詞に前置される *al* 及び *a* の起源については次項で述べるが、この序数は迂言的・補強的であると言える。更に又、“100番目の” *al o sutelea* と言う時、アルバニア語では全く同じく *i një qindëtë* と言うと Sandfeld (1930) は記している。この序数形式はアルバニア語の影響を受けて迂言的・補強的になったのであろう。

h) 前項の *al* (男性単数) 及び *a* (女性単数) は所有冠詞と呼ばれ、羅語独特のものであり、それぞれの複数形も存在する。これら *al* (古羅語は *alu*) *a ai ale* の起源は、それぞれ *AD+ILLUM AD+ILLAM AD+ILLOS AD+ILLAS* である。前置詞 *AD* に寄る所有の概念の表現形式は他のロマンス語に例を見ないでもないが、その場合でも、この形式が正則的に現れるのではない。ましてや、近代語で定冠詞となる指示形容詞と共に用いられる例は他のロマンス語にはない。形態素は他ならぬラテン語である。この所有冠詞が用いられるのは名詞の属格及び所有代名詞の前で、所有冠詞は必ず被所有物の性・数に一致する。そして、所有冠詞の直前では被所有物を表す名詞には定冠詞は付けない。Al. Niculescu (1965) に寄れば、この所有冠詞はアルバニア語にもあるという。*un băiat al vecinului* (隣人の息子の意。西語では、*un hijo del vecino*) はアルバニア語では、

një djalë i fqinit となる。又、アルバニア語の djali i fqinit を羅語に直訳すると、 *băiatul al vecinului となる。羅語の所有冠詞の用法はアルバニア語の影響を受けた結果であろう。

i) 所有冠詞は所有代名詞の一構成要素で、その所有代名詞は所有形容詞に所有冠詞を前置することによって得られる。所有冠詞は被所有物を表す名詞の性・数に一致しなければならないし、所有者とは人称・数において一致しなせればならない。極めて複雑である。

所有者 \ 被所有物	男性単数	女性単数	男性複数	女性複数
1 人称単数	al meu	a mea	ai mei	ale mele
2 人称単数	al tău	a ta	ai tăi	ale tale
3 人称単数	al său	a sa	ai săi	ale sale
1 人称複数	al nostru	a noastră	ai noștri	ale noastre
2 人称複数	al vostru	a voastră	ai voștri	ale voastre
3 人称複数	al lor	a lor	ai lor	ale lor

上の表は、羅語の所有代名詞の表である。所有代名詞に移る前に、所有形容詞について整理しておこう。実は、上の表で所有冠詞の al a ai ale を除くと所有形容詞が出来上るのである。ただし所有者が 3 人称複数の場合の lor(<ILLORUM) は人称代名詞の属格形を借用している。そして又、3 人称単数の său sa săi sale は口語では殆んど用いられずに代りに人称代名詞の属格形 lui(<ILLUI) ei(<ILLAEI) が用いられている。その代りに、羅語には 1・2 人称の単・複共人称代名詞の属格形がないのである。1・2 人称の所有の概念は所有形容詞又は所有代名詞で表わされるのである。例をあげると、

profesorul tău = tu profesor (西語)
eleva ta = tu alumna (西語)

の如く使う。即ち、所有形容詞は名詞に後置され、その名詞には、西語と異り、定冠詞が後倚している。上の表では 2 人称が tău,etc. vostru,etc. となっているが丁寧な表現の時は dumneavoastră という主格と同形態を借用して例えば prietenul dumneavoastră (あなたの友人) という風に言う。

mea の複数形が mele となっているのは、stea (星) の複数形が stele となることからの類推である。tale sale などは mele の類推であろう。

上で、羅語の 1・2 人称には属格形がないと言ったが、実は所有の概念を表すのは葡語・仏語・伊語・羅語では普通は所有形容詞で、西語ではなぜか人称代名詞の所有形又は属格形と言っている。それらの形態を次に示してみよう。

言語 人称・数	葡 語		西 語			仏 語		伊 語	
			弱 形	強 形		m. f.		m.	f.
被所有物が単数の時	1 単	m. f.		m.	f.	m. f.		m.	f.
	1 単	o meu a minha	mi	mío	mío	mon ma		il mio	la mia
	2 単	o teu a tua	tu	tuyo	tuya	ton ta		il tuo	la tua
	3 単	o seu a sua	su	suyo	suya	son sa		il suo	la sua
	1 複	o nosso a nossa	nuestro-a	nuestro-a		nôtre		il nostro	la nostra
	2 複	o vosso a vossa	vuestro-a	vuestro-a		votre		il vostro	la vostra
被所有物が複数の時	3 複	o seu a sua	su	suyo	suya	leur		il loro	la loro
	1 単	os meus as minhas	mis	míos	mías	mes		i miei	le mie
	2 単	os teus as tuas	tus	tuyos	tuyas	tes		i miei	le tue
	3 単	os seus as nossas	sus	suyos	suyas	ses		i suoi	le sue
	1 複	os nossos as vossas	nuestros-as	nuestros-as		nos		i nostri	le nostre
	2 複	os vossos as vossas	vuestros-as	vuestros-as		vos		i vostri	le vostro
被所有物が複数の時	3 複	os seus as suas	sus	suyos	suyas	leurs		i loro	le loro

上の表で、伊語の3人称は大文字にすれば2人称の丁寧な意味を表す。西語の弱形は必ず名詞に前置され、強形は後置される。弱形は強形から派生したもので中世は現代葡語・伊語・羅語と同様定冠詞がついていた。葡語と伊語はともに定冠詞がついていて、上表の所有形容詞形と所有代名詞形は全く同形である。以下に、西語と仏語の所有代名詞形を示そう。

言語 人称・数	性	西 語		仏 語	
		m.	f.	m.	f.
被所有物が単数の時	1 単	el mío	la mía	le mien	la mienne
	2 単	el tuyo	la tuya	le tien	la tienne
	3 単	el suyo	la suya	le sien	la sienne
	1 複	el nuestro	la nuestra	le nôtre	la nôtre
	2 複	el vuestro	la vuestra	le vôtre	la vôtre
	3 複	el suyo	la suya	le leur	la leur
被所有物が複数の時	1 単	los míos	las mías	les miens	les miennes
	2 単	los tuyos	las tuyas	les tiens	les tiennes
	3 単	los suyos	las suyas	les siens	les siennes
	1 複	los nuestros	las nuestras	les nôtres	
	2 複	los vuestros	las vuestras	les vôtres	
	3 複	los suyos	las suyas	les leurs	

ゲルマン語の場合、所有者の性・数（特に3人称の）が明確に示される形態を取るが、羅語を除くロマンス諸語に共通して言えることは、所有者の性は全く問題にされず被所有物の性・数に関心があるということである。羅語については上に触れたが、西語の3人称の場合 *su libro* とした場合

合、de él de ella de usted de ellos de ellas de ustedes のどれか1つを補わなければ、これらのうちの誰の所有になるのか不明な時がある。

以上見た通り、ロマンス諸語の所有形容詞・代名詞の形態に一致を見ないし、羅語の所有代名詞は語源までさかのぼると、葡語・伊語よりも迂言的・補強的であることが判る。

次に、所有の概念が主格補語の時どの様に表わされるか見よう。

英語	This book is mine.
葡語	Este livro é (o) meu.
西語	Este libro es mío.
仏語	Ce livre est à moi.
伊語	Questo libro è mio.
羅語	Cartea aceasta este a mea.

葡語の o meu という冠詞つきの形態は強意である。当然無冠詞の形もある。仏語の à という前置詞は AD に由来するから、羅語の形態に類似している。いずれにせよ、この場合所有代名詞を使う（葡語と）羅語は特異である。

j) 現代西語の人称代名詞は、1・2人称主格形に関して、特殊な形態を示す。それぞれ、nosotros vosotros と言う。中世以来17世紀まで、それぞれ nos vos であった。現代語は補強的表現である。意味的に2人称の敬称で形態上3人称である言語は、葡語・西語・伊語の3言語で、それぞれ você (複数 vocês) usted (ustedes) Lei (Loro) と言う。17世紀の西語には、例えばセルバンテスに voacé や vuesa merced という形態があり、後者が今日 us ted という風に縮約されて3人称の扱いを受けている。葡語の você は現代では親密な間柄で用いられる為、より丁寧にする必要のある時は、o senhor などを使う。

羅語の場合、dumneavoastră という代名詞は単・複同形であり、要求する動詞も同形で、上の3言語の場合と異り、2人称複数形である。Al. Niculescu (1965) に寄れば、dumneavoastră が単数の意味で使われるのは仏語の影響で、19世紀からと言う。仏語の丁寧な表現は vous で、動詞は2人称複数が要求される。dumneavoastră は your authority を意味するのであるが、ほぼ同じ意味で使われる2人称の主格代名詞に dumneata がある。この主格形の丁寧さの度合は dumneavoastră よりも一段落ちて、要求する動詞は2人称単数である。その差は、-voastră という所有形容詞によって起っている。-voastrăの方が-ta より丁寧な意味を表し得ることは、西語や仏語の vos (otros)・vousの方がtuより丁寧であるのと同じである。

この dumneata に、mata matale mătălută mătălică tălică などの縮約形やそれに縮少辞の付いた形などの多くの変種があるのは、葡語の3人称(意味は2人称)に você-vossemercê-o senhor vossência などの変異形があるのと同じく、ロマンス諸語の中で特異な存在である。

又、羅語の場合、他のロマンス諸語と全く異なることであるが、意味も形態も3人称である代名詞として、el-dînsul-dumnealui ea-dînsa-dumneaei がある。各組の後の代名詞程より丁寧な表

現であるが、目前に居ない人を代名詞で丁寧に言うロマンス語は羅語以外には無い。合成代名詞であるが、その形態素はラテン語である。羅語の主格人称代名詞は迂言的・補強的であると言えよう。

h) 3 人称の代名詞で与格と対格で形態が異なるのは、全てのロマンス語に共通したことである。又、1・2 人称単・複に与格と対格の区別がないのは、羅語以外の 4 言語に共通した現象であるが、羅語には、特に単数において、与格と対格に明確な形態的差異がある。1・2 人称の与・対格代名詞を次に示そう。

人称 数 格		1				2			
単	与	mi	îmi	mi·	·mi	ti	îti	·ti	ti·
	対	mă	m·	·mă		te	t·	·t	
複	与	ne	ni	ne·	·ne	vă	v·	·vă	
	対	ne	·ne	ne·		vă	v·	·vă	

これらの中には、弱形・強形・前倚形・後倚形などの区別がある。この項目に関して、羅語は守旧的であると言えよう。

l) 再帰代名詞に関しても同様に 4 言語には与・対格の区別はなく同一形が用いられるが、羅語とグルマチア語の場合は区別がある。羅語の場合、その上に弱形・強形の差異もある。羅語の 3 人称再帰代名詞を次にあげよう。

		強			弱			
与	sie	sieși	(古 sie)		își.	și	și·	·și
対	sine		(古 sineși)		se	se·	·se	s·

羅語に与格と対格の形態的差異があるのは、大きな音韻変化をこうむっているとは言え、ラテン語を継承している為で、羅語が守旧的であることを示す例である。

m) ラテン語では、相手に近い物を指す時は、主格形をあげると、ISTE ISTA ISTUD, 話者に近い物を指す時には、HIC HAEC HOC, 第 3 人称に対応するものとして、ILLE ILLA ILLUD が使われていた。これらに由来する現代語の指示形容詞は、羅語以外では殆んどの場合名詞に前置されるが、それらの形態は次の通りである。

言語 遠近	ラテン語		葡 語		西 語		仏 語		伊 語	
	数	格	単	複	単	複	単	複	単	複
近 称	HIC HAEC HOC	HI HAE HAEC	este	estes	este	estos	ce(t)・・ci ces・・ci	cette・・ci	questo	questi
			esta	estas	esta	estas				
中 称	ISTE ISTA ISTUD	ISTI ISTAE ISTA	esse	esses	ese	esos	ce(t)・・lā ces・・lā	cette・・lā	questa	queste
			essa	essas	esa	esas				
遠 称	ILLE ILLA ILLUD	ILLI ILLI ILLA	aquele	aqueles	aquel	aquellos	ce(t)・・lā ces・・lā	cette・・lā	quello	quegli
			aquela	aquelas	aquella	aquellas				

ラテン語の3性が現代語では2性になっていることは言うまでもない。

羅語の場合、名詞の前に来る前置形と後に来る後置形の差異があること及び名詞の格に呼応して指示形容詞にも格変化があることが特徴的である。次にその様な羅語の指示形容詞形を示そう。

言語 遠近	前後置形 数 格 性	前 置 形				後 置 形			
		単		複		単		複	
		男	女	男	女	男	女	男	女
近	主・対	acest	aseastă	acești	aceste	acesta	aceasta	aceștia	acestea
	与・属	acestui	acestei	acestor		acestuia	asesteia	acestora	
遠	主・対	acel	acea	acei	acele	acela	aceea	aceia	acelea
	与・属	acelei	acelei	acelor		aceluia	aceleia	acelora	

これらの指示形容詞はロマンス諸語で形態的統一を見ない例である。葡語と西語がラテン語の近・中・遠の3称を継承しているが、かえてそのことゆえに、むしろ特異な存在である。しかし、その葡語と西語でも、ラテン語の近称が正確に保存されているのではなく、ラテン語の中称が近称となり、中称はラテン語の強意代名詞 IPSE IPSA を借用している。遠称は葡・西・伊の3言語に共通点を見るが、それらの語源は ECCE+ILLE・ILLA であろう。ILLE は全てロマンス語において定冠詞として使われて指示機能が低下した為に、今度指示形容詞となる為には形態的に補強する必要が生まれた。この補強は、仏語で近称に ci (<ECCE+HIC)、遠称に là (<ILLAC) が使われているのに似ている。尚、仏語の ce は ECCE+HOC に由来し、cet は ECCE+ISTE から派生している。いずれも補強の形態素が新たに必要である点が共通している。伊語の questo quello も仏語の場合とほぼ同じく、Elcock (1975) に寄れば、それぞれ ECCU+ISTUM ECCU+ILLUM である。ECCE+ISTE (ECCU+ISTUM) が仏語では cet, 伊語では questo になっていて、あまりにも両者の発音が異なるのは注目に価する。アカデミア (1975) に寄れば、羅語の acesta aceasta に相当するラテン語はそれぞれ、ECCE+ISTU ECCE+ISTA である。この様に見た場合、ロマンス諸語の近称はラテン語の中称 ISTE を中核にでき上っていることが判るが、

各言語の特殊な音韻変化の結果、今日の様な一見して異なる語源を想定せしめる程である。遠称の場合、葡語・西語・伊語・羅語とも ECCE+ILLE ECCE+ILLA から派生していることは明らかである。羅語では ECCE+ILLE は cel ともなる。これは形容詞的冠詞と呼ばれ、音形的にも用法的にも、acel と大巾に異っていることは注目に価する。

この項目に関して、羅語は守旧的であり、その上、迂言的・補強的であるとも言える。

n) ロマンズ諸語の定冠詞の主格形は次の通りである。

言語 数 性		葡 語	西 語	仏 語	伊 語	グルマチア語	羅 語
sg.	m.	o	el	le	l' lo il	el	-(u)l
	f.	a	la	la	l' la	la	-(u)a
pl.	m.	os	los	les	gli i	i	-i
	f.	as	las	les	le	le	-le

葡語に l- が欠けていたり、伊語に多くの変異形があるのはいずれも音声的理由に寄るものである。羅語を除く全ての言語の場合も、ラテン語の指示形容詞 ILLE 及びその他の指示形容詞の対格から派生している点及びこれらの定冠詞が実詞に前置される点が共通した特徴であるが、羅語の場合、同様に ILLE 類から派生してはいるものの、必ず実詞に後置されしかも接尾される点並びに名詞の格変化に呼応して主・対格用形 (base form) と与・属格用形 (case form) の異なる2種類の定冠詞がある点が、他のロマンズ諸語の場合と大きく異なる。

所有形容詞・指示形容詞・形容詞的冠詞など意味上類似した品詞が羅語では一様に名詞に後置される点は注目に価するのであるが、ラテン語では、そして Aebischer の言う articuloide の時代には特に、HOMO ILLE BONUS という語順も ILLE HOMO BONUS という語順同様に一般的であったことが思い出される。だから、例えば西語に例を求めれば、Alfonso el Sabio (賢王アルフォンソ) などという表現もある。この様になったのは、“弁慶がな”式の変則分割によって、HOMO-ILLE BONUS となったと考えられる。そして、羅語だけが他のロマンズ語と異り、後倚形を使っているのであるが、その後倚形に決定されるに至ったきっかけは多分に偶然的要素も作用したと思うが、又同時に、現代西語では指示形容詞の後置形の方が前置形よりも意味が強いという例が示す通り、いわゆる“意味のインフレ現象”の結果でもあろうし、又同時に、同様に後倚定冠詞を有すブルガリア語とアルバニア語の影響は否定できないであろう。後倚形という形式のみならずその用法も、例えば前置詞に支配される名詞には定冠詞を用いないなど、ブルガリア語とアルバニア語と類似していて、特に後者との類似はいちぢるしい。

羅語の定冠詞は、名詞の場合と同様、base form と case form とを区別しなければならないが、男性単数の case form は lui であり、※ILLUIUS<ILLIUS にさかのぼる。次の特異点は、決して前置詞と縮約しないことである。それは定冠詞が例外なく後倚的だから当然のことである。定冠詞と前置詞が縮約しない次の言語は、西語である。14世紀には para と el が結合した paral という形もあったが、現代語では a と de の2つが el と縮約するのみである。次は仏語で、au aux du

des の4ヶであり、葡語や伊語は、それぞれ16ヶと28ヶで飛び抜けて多い。

羅語の定冠詞に関する次の特徴として、葡語にも例を見ないでもないが、地名・人名とともに用いられるということを指摘できよう。西語でも女性の人名には時として定冠詞が用いられるが、限られた例である。羅語の場合、女性の人名とともに用いられる場合ははるかに多い。Marie Ileană Ioană などは通常、Maria Ileana Ioana の如く定冠詞付きで用いられる。男性の人名の場合も Ionescu Georgescu Popescu などの姓を表す -u は定冠詞の名残りであるが、全ての姓を表す男性の名詞が定冠詞を取るわけではなく、Staicuț の様な例もある。地名の女性名詞にも通常は定冠詞が付いているが、西語では定冠詞を削除する傾向にあるのと対照的である。Românie—România Spanie—Spania Franța—Franța Japonie—Japonia などすぐ思い付く例をあげたが、各対の後者が定冠詞付きの形であって、独立して用いられるのは普通後者である。これらの地名に形容詞が前に来るとその形容詞に定冠詞が付いて、地名の名詞からは定冠詞が落ち、例えば frumoasa Românie (美しいルーマニア) の如くなる。

又、反対に男性の地名名詞は通常定冠詞をとまなわないが、それが主語になったり、限定詞によって修飾された場合は例外である。例えば、București (ブカレスト市) は、独立した時は今書いたように言われるが、これが主語になり、西語の Bucarest es la capital de Rumania というのは、羅語で Bucureștiul este capitala României と言う。

o) 羅語の場合、形容詞と副詞の関係も特殊である。-esc という接尾辞を有す形容詞から、その接尾辞の代りに -ește という接尾辞を付けることにより、同じ意味の副詞が得られる。例えば、femeiesc (女の様な) → femeiește (女の様に)。この -ește はアルバニア語の -isht に由来する。例えば、

tshobanisht — ciobănește (ジプシー風に)

turqisht — turcește (トルコ風に)

形容詞から副詞を作る第2の方法として、-îș 又は -iș を付加する方法がある。例えば、chior (近視の) — chiorîș (近視眼的に)。

第3の方法は、様態の形容詞に -mente (MENS の奪格) を添加することによって得られる。これは羅語以外のロマンス諸語で一般に行われる方法であり、今日の羅語にこの形態を見るのは、仏語や伊語から新造語法を借用した結果である。MENS が女性であるから前にくる形容詞を女性形にするのは西語などにも見られる現象である。

さて、“ロマンス語”という時の Romance が ROMANUS の奪格に由来することは周知の通りである。ラテン語で PARLARE (又はLOQUI)、ROMANICE (ローマ風に話す) という時、羅語では a vorbi românește a vorbi limba română a vorbi romana の3通りの言い方がある。

Alf Lombard (1974) によれば最初の表現方法が一番普通だと言う。葡語・西語・仏語・伊語ではそれぞれ、falar rumeno hablar rumano parler roumaine parlare rumeno の如く無冠詞である。今無冠詞と言ったが、言語名は、実はロマンス諸語の場合起源的には副詞又は形容詞のはず

である。西語では中世初期には *hablar romance* という表現しか無く、まだ国名に一致した言語名ができていなく、*romance* は副詞のはずである。*español* (古形は *español*) が国又は地方の形容詞として用いられるのは10世紀頃からであるが、言語を指すのはずっと後である。ところが西語の副詞は *—mente* を付加する場合が多い為に、*romance* という形態も次第に名詞と考えられ、時を同じくして *castellano* などという形容詞的な言語名ができたのであるが、副詞や形容詞に定冠詞を冠す習慣が無いのをそのまま受け継いでいるのである。*Aquí se habla español* と言えば“ここではスペイン語が通じる”という意味だが、*español* を *lo* に置き代えて **Aquí se lo habla* と言えないということはやはり形容詞又は副詞起源、より正確には *ablativo* 起源だからである。(否、もしかして、“*hablativo*” かも！)

羅語の場合、言語名を表す *—ește* の接尾辞を有す副詞が、*a ști* (知る)、*a înțelege* (理解する) *a învăța* (学ぶ) などの動詞の補語として用いられることは、副詞の名詞化が今日でも行われている特異な現象である。これと同じ様な語法は現代スラブ語にもある。Alf Lombard (1974) によると、仏語の *Je sais le roumain* は羅語では、*Știu românește* とも *Știu româna* とも *Știu limba română* とも言える。同様に、*Je comprends le roumain* は *Înțeleg românește* でも *Înțeleg româna* でも *Înțeleg limba română* でも良い。又、*J'apprends le roumain* は、*Învăț românește* や *Învăț româna* や *Învăț limba română* の3通りの言い方が可能である。

この項目に関して、羅語は守旧的であると同時にスラブ語的であると言える。

p) 羅言の前置詞の特徴は、*base form* 支配と *case form* 支配の2種類があることである。とは言え、目的語が名詞の場合は、その被支配格の区別は不明瞭かつ不必要であるが、代名詞の場合は必要である。羅語の *base form* 支配の前置詞のうち主なものは次の通りである。

către (<CONTRA) *spre* (<SUPER) *cu* (<CUM) *de* (<DE)
despre (<DE SUPER) *după* (<DE POST) *fără* (<FORAS) *în* (<IN)
între (<INTER) *la* (<ILLAC) *linge* (<LONGUM AD) *pe* (<SUPER)
peste (<PRAE SPRE) *pentru* (<PRINTRU) *prin* (<PRAE IN)
pîna (<PAENE AD) *printre* (<PRAE INTER) *sub* (<SUB) など。

これらがラテン語の対格支配の前置詞を基本にできていることは明白である。

ラテン語の格がロマンス諸語では融合した結果、羅語では2つの格が残り、仏語においても比較的遅くまで2格の形態的差が残ったとは言え、現代では仏語でも他のロマンス諸語でも格の区別は無くなったので、羅語以外のロマンス語を云々する時に *de* の支配する格を心配する必要はないわけであるが、*DE* は元々奪格支配の前置詞であり、ラテン語の奪格は羅語においては主格と対格に吸収されて *base form* を形成しているところからして、ラテン語の *DE* に由来する羅語の前置詞 *de* が *base form* 支配の前置詞であるのは当然である。*de* は意味的類推から一般に属格と思われていて、その結果 *case form* 支配と思われがちであるが、間違いである。そして、この前置詞 *de*

を使った次の様な前置詞句が **base form** 支配となるのは当然と言えよう。

(in) afară de alături de aproape de departe de dincoace de dincolo de
înainte de vizavi de față de timp de など

これらの前置詞句が表す意味と同一の意味を表すロマンス諸語の前置詞(句)の形態は一致しないが、通常は **de** を含んでいる。羅語の特異性と言えることは、全てラテン語の形態素を用いてはいるが、個々の形態素の意味を時には補強したり、時には微妙な意味を出す為に多くの形態素を複合的に使用する傾向にあるということである。

“～のお蔭で”という意味を表す羅語の3つの前置詞 **datorită grație mulțumită** は、たいていの場合、その目的語に **case form** を要求するが、目的語が人称代名詞の時は、与格の強形でなければならない。例えば“私のお蔭で”は羅語では **grație mie** となるが、葡語では **graças a mim**、西語では **gracias a mí**、仏語では **grâce a moi**、伊語では **grazie a me** となり、いずれの言語においても、いわゆる前置詞格の代名詞を用いていて、与格の意味は羅語以外では **AD** という対格支配の前置詞によって表わされる。この様に、表面に現れた形態に不一致が見られても、その根底にあるものはあくまでもラテン語的であると言える。

次にあげる羅語の11個の前置詞は、その目的語となる実詞に **case form** を要求するが、場合によっては、前置詞 **lui** を目的語との間に挿入する。

asupra (<**AD SUPRA**) **deasupra** (<**DE AD SUPRA**) **de-a lungul** (<**DE AD LONGUM ILLUM**) **dedesubtul** (<**DE DE SUBTUM ILLUM**) **împotriva** (<**IN protiva** = スラヴ語) **contra** (<**CONTRA**) **împrejurul** (<**IN PRAE GYRUN ILLUM**) **înaintea** (**IN AB ANTEILLAM**) **înăuntru** (<**ILLAC INTRU ILLUM**) **îndărătul** (<**IN DE RETRUM ILLUM**) **înapoia** (<**IN AD POST ILLAM**)

これらの複合前置詞の語源は、**împotriva** の **protiva** がスラヴ語起源であることを除けば、あとは全てラテン語に求められる。しかも、それらの分解された形態素の前置詞は悉く対格(又は奪格支配)即ち羅語では **base form** 支配となってしまうのに現実には **case form** 支配である。その理由は奪格=**case form** という類推によるのだろうか判然とは私には判らない。この項目に関して、羅語は極めて守旧的かつ迂言的・補強的であると言える。

結論) 羅語の語彙の面では、**Grigore Nandris (1969)** によれば、ラテン語的要素は1/5だけであり、スラヴ語的要素が2/5を占め、トルコ語・ギリシャ語・ハンガリー語・アルバニア語の合計が2/5に達する程の特異性を示している。もっとも、スラヴ語的要素が数的に多いとは言え、日常使われる単語はラテン語に由来するものの方が多く、スラヴ系の単語及び形態素はラテン系に比して創造的ではないと言える。しかし、ロマンス諸語の中であって、非ラテン語的語彙が大部分を占めるのは、西語の中のアラビア語彙は10%であるから、それ以上に特異な現象に違いない。

形態面においては、語彙の様には多くの特異性はないかも知れないが、今まで見て来た如く、やはり特異と呼んでしかる可き現象があることは否定できない。もちろん、時には仏語や葡語の方が

特殊な形態を有している場合もあるが、全体的には他のロマンス諸語とは違う様相を呈しているのである。

Sextil Pușcariu (1937) をはじめとして多くの学者が、羅語は“守旧的”だと言うが、名詞の格変化及び男・女・中の3性の存続というレト・ロマン語以外の他のロマンス諸語に例を見ない2つの現象においては特に守旧的であり、私が上にあげた例の中には、守旧的と言える項目は実に多い。守旧的ということに関して、現在のルーマニア（古ダーキア）が一番遅くローマ帝国の版図に編入されたのに一番古い形態を保っているからといって、別にふしぎではない。ダニューブ河以北のこのことのみを考えれば確かに遅れてはいたが、羅語の発生の地はダニューブ河以南であり、その地はイベリア半島のローマ化と同じく、早くローマ化されていたのだから、中世に入っている程度孤立した為に守旧的性格が強くなった。それは、ユダヤ人の西語の場合と同じである。

さて、1つの単語の為に他のロマンス諸語の場合より多い形態素を使っているのは、いわゆる、“インフレ現象”であり、それはダニューブ河以南の地で数的に勝るブルガリア語・トルコ語・アルバニア語などの中でラテン語的なものを死守し存続する為に、又意味をより明確・明瞭にする必要から生れた方便であろうと思われる。

又、ラテン語的なものの保存に努めたとは言え、バルカン半島という地理的条件によって、隣接するアルバニア語やブルガリア語から受けた影響は決して否定できない。その際、造語法そのものはアルバニア語的あるいはブルガリア語的であっても、形態素が必ずラテン語であることが特異性の原点であり、他のロマンス諸語と比較した際に、最も特異な現象として目に映るのである。そして、アルバニア語やブルガリア語から強い影響を受けたその他は、Constantin C. Giurescu (1972) などの、ナショナリズムに立脚した根強い反対はあるが、やはり、ダニューブ河以南のバルカンの言語風土に起因するところが多いと言える。

BIBLIOGRAPHY

- Al. Niculescu : Individualitatea limbii române între limbile romanice, 1965, București.
Al. Rosetti : Brève histoire de la langue roumaine des origines à nos jours, 1973, The Hague.
Academia (Republicii Socialiste România) : Dictionarul explicativ al limbii române, 1975, București.
Grigore Nandris : Colloquial Rumanian, 1969, London.
Sextil Pușcariu : Etudes de linguistique roumaine, 1937, București.
Dámaso Alonso : Obras Completas, 1972, Madrid.
Constantin C. Giurescu : The making of the Romanian people and language, 1972, București.
Alf Lombard : La langue roumaine, 1974, Paris.
Pavao Tekavčić : Grammatica storica dell'italiano, 1972, Bologna.
Florica Dimitrescu : Introducere în morfosintaxa istorică a limbii române, '74, București.
Meyer Lübke : Grammaire des langues romanes, 1974, Genève.
M. Giulio Bartoli : Das Dalmatische, 1975, (Kraus Reprint).
Kr. Sandfeld : Linguistique balkanique, 1930, Paris.
Aurelio Rauta : Gramática rumana, 1973, Salamanca.
W. D. Elcock : The Romance languages, 1975, London.
Nelo Drizari : Albanian-English and English-Albanian dictionary, 1957, New York.
伊藤太吾 : ルーマニア語名詞の格融合と性転換について、1976、ロマンス語研究 Vol. 10 東京。
伊藤太吾 : ルーマニア語の起源について、1976、大阪外大学報 Vol. 35, 大阪。